

はがき抄

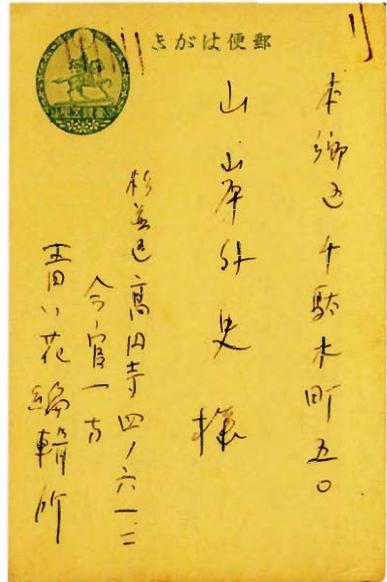
書簡番号 1 ～ 83

昭和9年(1934年)〔月日不詳。年は文面から推定〕

さん日は快乳いなりあり。こんどの同人会
は十一月十日に銀座山の小舎で午後
七時からひらくことにいたしまし。淡島裡
に会をひらき会を内ぢたいと思つておます。
ぜひおいで下さい。

「五月の花」について原稿三枚内外。44紙欄の
くつろびの原稿一枚。同人費五日。十一月
十日まで、表紙の編輯所へお送り下さい。
お務めます。十日の会に御持参をなさ
ることも可也。

ニヤチ●に 評論(何枚でも可)を送つていただけら
う。士平甚じります。



【フット】

「青い花」——太宰治、今官一が中心となって昭和九年十二月に創刊した同人雑誌。編輯兼発行人は今官一。一号で終刊。同人は、岩田九一、伊馬鶴平、斧稜、太宰治、檀一雄、津村信夫、中原中也、太田克巳、久保隆一郎、安原善弘、小山祐士、今官一、北村謙次郎、木山捷平、雪山俊之、宮川義逸、森敦の計十八名。誌名は太宰の案。「ロマネスク」を掲載し好評を博する。「青い花」発刊をきっかけにして、山岸外史、檀一雄と急速に親しくなる。

先日は失礼いたしました。こんどの同人会は十一月十日に銀座山の小舎で午後七時からひらくことにいたしました。談笑裡に会をひらき会を開きたいと思つてゐます。ぜひおいで下さい。

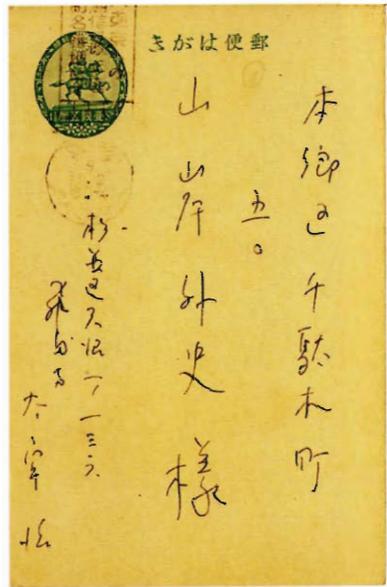
「青い花」について原稿三枚内外。艸紙欄のくつろいだ原稿一枚。同人費五円。十一月十日までに、表記の編輯所へお送り下さい。お願い致します。十日の会に御持参なされても可です。

二号に評論（何枚でも可）送つていただけたら幸甚です。

本郷区千駄木町五〇 山岸外史様

杉並区高円寺四ノ六二二 今官一方 青い花編輯所

今朝お手紙 いただきました。不足税を
六錢とられました。けれども六錢以上の
價値のある文書なので、別に六錢を惜し
いと念はなかつた。燧石の銃が、ちはん
圃白かつた。太い筆流を確実するの
は僕にまかせ給へ。散文の論文は、た
しかに通讀したのであるから、安心あれ。その
うち、せういちど、讀んでよいと思いつておる。
いま、ボンドリエルのガソリンスタンドのイツセイ
を讀みかけ、奥見へ其本書したくなつた。



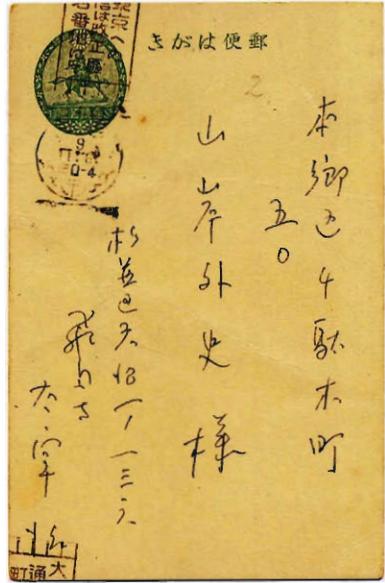
今朝お手紙いただきました。不足税を六銭とられました。けれども六銭以上の価値のある文章なので、別に六銭を惜しいと思はなかつた。灯台の話がいっぽん面白かつた。太宰治を研究するのは僕にまかせ給へ。散文の論文は、たしかに通読したのですから、安心あれ。そのうち、もういちど読んでもよいと思つてゐる。いま、ポオドレエルのダンデイスムについてのエッセイを読みかけ、貴兄へ葉書したくなつた。

本郷区千駄木町五〇 山岸外史様
 杉並区天沼一ノ一三六 飛島方 太宰治

【フット】

散文の論文——山岸外史が加わつた同人雑誌「散文」の評論。山岸外史「人間太宰治」には「この頃（註・このはがきをもらった頃）佐藤春夫論をのせたあとだったか、それとも、散文の古い号を送つたのだったかも知れない」とある。昭和九年四月発行の創刊号に山岸外史の「紋章」と「禽獣」の作家達」が、同年十一月発行の一卷八号に「佐藤春夫論」が掲載されている。

飛島方——下宿ではなく、飛島定城の家族と同居。飛島定城は、三兄圭治の友人で、太宰の高等学校、大学の先輩（大学は法科）。
 「東京日日新聞」記者。



山岸兄

恋愛関係などといふので、僕はうろたえた。愕然とした。

(冗談だよ。)

何か書いてゐますか。「職工と微笑」を読みましたか。一

読の価値はあると思ひますよ。

十日の会で呑み合ふのをたのしみにしてゐます。僕は小

説を一日一枚づつノロノロ書いてゐます。

本郷区千駄木町五〇 山岸外史様

杉並区天沼一ノ一三六 飛島方 太宰治

【校異】

うろたへた〔全集〕 → うろたえた

【ノート】

「職工と微笑」——松永延造『職工と微笑』（春陽堂、昭和三年九月）。

せんちことをいふはふいで書いて
あれたらいどんちんちや。

十八日あびあさうた。ひとつ書け

津村信夫君にも詩だけい

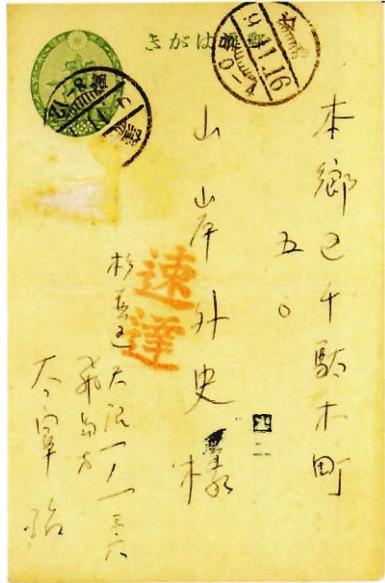
まいから送るやうに電話で言つ

てやつて下さい。

たのみます。

あはれた向平路をかかる屋敷に

!!!



そんなことを言はないで書いて呉れたら、どんなもんぢや。

十八日まで、よいさうだ。ひとつ書け!!!

津村信夫君にも、詩だけでよいから、送るやうに電話で言つてやつて下さい。

たのみます。

あはれ、太宰治をかかゝる屈辱に……。

本郷区千駄木町五〇 山岸外史様
 杉並区天沼一ノ三六 飛島方 太宰治

【校異】

ひとつ書け!!〔全集〕——↓ひとつ書け!!!

【フット】

十八日まで、よいさうだ。——「青い花」創刊号の原稿催促。山岸外史は随筆「一枚の絵葉書」を寄稿した。

お伺ひしてはよいのだが、このごろ、ひとに
 お進ぶのが、こはく(？)(決心がつかず)な
 かたが、行けな。い。
 そろそろ二号の編輯をのめます。同人全
 部に、原稿と同人費のサイソク、若いひと
 にさせたら、どうか。
 同人会は、どうです。
 私、まじの花の原稿、いま工夫中。
 お願ひ申します。

杉並区方根一三三 花あふ

大守 治



お伺ひしてもよいのだが、このころ、ひとに逢ふのが、こ
 はく(?) (決心がつかず) なかなか行けない。
 そろそろ二号の編輯たのみます。同人全部に、原稿と同人
 費のサインク、「若いひと」にさせたら、どうか。
 同人会は、どうです。
 私、青い花の原稿いま工夫中。
 お願ひ申します。

杉並区天沼一ノ三六 飛島方

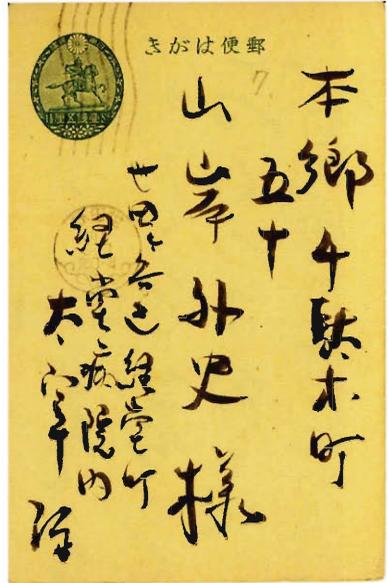
太宰治

本郷区千駄木町五〇 山岸外史様

【校異】

「青い花」〔全集〕 → 青い花

佐藤考次氏への手紙は、
二三日中に書いて出します。
おほいなる知己を得た
よろこびを書き綴るつもり
です。実は二三日まへに緒
方氏へ、蕨、三石の初花をささ
げたばかりなので、どうも書きに
くいのだ（同じ文句にホリさうで）
二三日してから書いて出します。



【フリート】

緒方氏——緒方隆士。「日本浪漫派」同人。

三枚つづきのがきの二枚目。一枚目の所在は不明。一枚目の文面は以下のとおり（『太宰治全集』による）。《お手紙、いま読んだ。よい友を持つたと思つた。生涯の記念にならう。こんなときには、ダラシナイ言葉しか出ないものだねえ。歓喜の念の情態には、知識人も文盲もかはりはない。「バイザイ！」これだ。／君は僕の言葉を通じて呉れるか。文字のとほりに信じて呉れ。いいか。「ありがたう」】

経堂病院——四月五日に阿佐谷の篠原病院で急性虫垂炎の手術を受け、腹膜炎を併発、血痰が出たため経堂病院に転院した。虫垂

佐藤春夫氏への手紙は、一三日中に書いて出します、「おほいなる知己」を得たよろこびを書き綴るつもりです。実は二三日まへ、緒方氏へ、歓喜の初花をささげたばかりなので、どうも書きにくいのだ。（同じ文句になりさうで。）
二三日してから、書いて出します

本郷千駄木町五十 山岸外史様
世田谷区経堂町 経堂病院内 太宰治

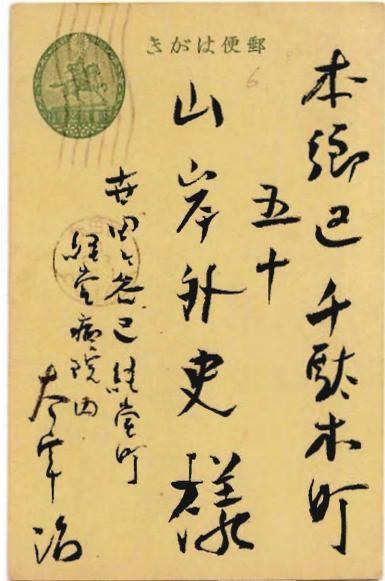
【校異】

書いて出します。（全集）——書いて出します

炎の手術後、痛み止めのパピナールの注射を受け、それが常習化し退院後パピナール中毒に苦しむ。

「虚構の春」の第十四の書簡に「『道化の華』早速一読甚だおもしろく存じ候。無論及第点をつけ申し候。（中略）ほのかにもあはれる真実の蛍光を発するを喜びます」という佐藤春夫の吉田潔宛書簡があるが、山内祥史「解題」（『太宰治全集』第一巻、筑摩書房、一九八九年六月。以下、「山内祥史「解題」」とのみ記す）によれば、「吉田潔」は山岸外史で、山岸が入院中の太宰にこの書簡を届け、それに対して太宰が「昭和十年六月三日付山岸外史宛三枚つづきの葉書を出している」とのことである。

陶工が粘土をこねくりながら、
 訪問者とお天気の話をし
 してゐる。僕のお天気の話
 など、陶工のお天気の話
 なんと大差なし。全く別
 なことを考へておられ
 ぬくつてゐる。
 自由の子といふより
 仕事のための自由の子の
 自由の子といふより



陶工が粘土をこねくりながら、訪問者とお天気の話をしてゐる。僕の文学談など、陶工のそのお天気の話と大差なし。口とは全く別なことを考へながら、仕事のための粘土をこねくつてゐる。

「自由の子」といふより「すね者」と言つたほうが自由の子の真意をつたへうる

本郷区千駄木町五十 山岸外史様
世田ヶ谷区経堂町 経堂病院内 太宰治

【校異】

〔改行なし〕「自由の子」〔全集〕→〔改行〕
つたへうる。〔全集〕→つたへうる

【フート】

三枚つづきのはがきの三枚目。一枚目の所在は不明。

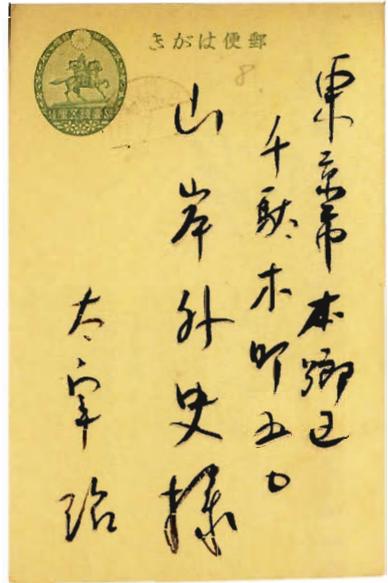
書簡番号 8 昭和10年（1935年）7月、日にち不詳（消印）

病氣全快して左記へ轉
居りたすまるととくあす
お知ら申せしめす

千葉東武船橋

本宿 一九二八

五日市



病氣全快して左記へ転居いたしました、とりあへずお知らせ申上げます、

千葉県船橋町五日市本宿一九二八

東京市本郷区千駄木町五〇 山岸外史様
大宰治

【校異】

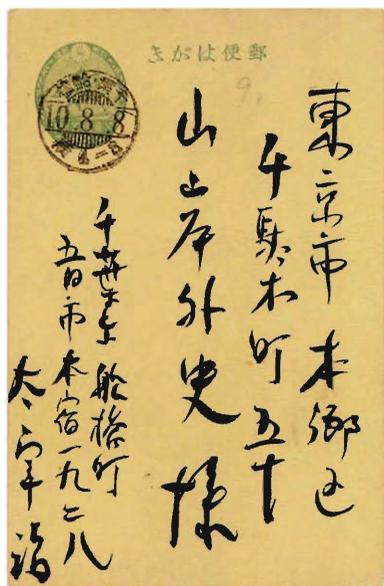
七月一日〔全集〕 → 7月、日にち不詳
とりあへず、〔全集〕 → とりあへず

お知らせ申上げます。〔全集〕 → お知らせ申上げます、

【フート】

左記へ転居——六月三十日に経堂病院を退院し、北芳四郎が手配した船橋の借家に入った。

土曜の夕集いよ。また船に乗らう。
 いま一冊が
 糞つて 糞烈を
 求む。これがカンシ
 ヤクのたぬて あった。
 ぼく「糞烈」の突下は兄
 に劣らないと思つてゐる。
 誰か何と云つていふまで、さう確信してゐる。



【フット】

同日付けの以下の文面のはがきがある〔所在不明。『太宰治全集』による〕。《山岸君／今夕の君の手紙、いまた繰りかへして読み、屈辱、無念やらかたなく転てんした。私は侮辱を受けた。しかもかつてないほどの侮辱を。／けれどもぼくは君の友人だ。かうなると、いよいよこの親友と離れがたい。君も同じ思ひであらうと思ふ。／ソロモンの夢が破れて一匹の蟻。／いまは夜の一時頃だ。／土曜あたりに、また逢つて話したいのだが。／私は、けふよりまた書生にならうと思つてゐる。いままでの僕はたぶん「作家」であつた。七日午前しるす。／おれはしかし、病人でない。絶対狂つてゐない。八日朝しるす。／三服のスイミン薬と三本の注

「いま再び粧つて熾烈を**求む**」これがカンシヤクのためであつた。ほく、「熾烈」の点では兄に劣らないと思つてゐる。誰が何といつても、いまでも、さう確信してゐる。土曜のパンに來いよ。また船に乗らう。

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史様
千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

【校異】

求む〔全集〕 → 求む。

ほく〔全集〕 → ほく、

射でふらふらだ。昨夜一睡もせず。八日朝しるす。その前日、八月七日付けのはがきもあり、続けて書かれたものと思われる。これに対し山岸外史は『太宰治おぼえがき』で、「考えてみると、太宰はこの頃、パピナールを打つていたわけだが、ほくの書いた手紙の文章も痛烈なものだったのだと思う。人間主義者のつもりであり、生活派だったほくではあるが、芸術至上主義的な作家面（作家面）をしている太宰が氣にくわなかつたのだと思う」と書いている。なお、山内祥史「解題」によれば、「虚構の春」の第十三の書簡（太宰の書簡を批判している）は、山岸外史からの來簡が使われており、「この來信に対し、太宰治は、昭和十年八月七日付や八月八日付の山岸外史宛葉書を出したのであろう」としている。

昭和10年(1935年) 8月27日 [消印]

背後をかへり見た問題に就いて)

たしかに君は、真心のたつたのた

それは、あるときすむに、ほくも判

つてぬた。ほくはあるとき、君の言は

一政を成るじて、あや、と思つた。好

意を感じた。 ~~ぼくの牛紙の元、もいちど読み直してほし。~~ 僕その意味で

君の牛紙に書かれたのが、心、通ぜぬもどかしさ。 ~~君の家と世評家なる、ぼくの時業もその意味なのね。~~ 決意的に

このつては、

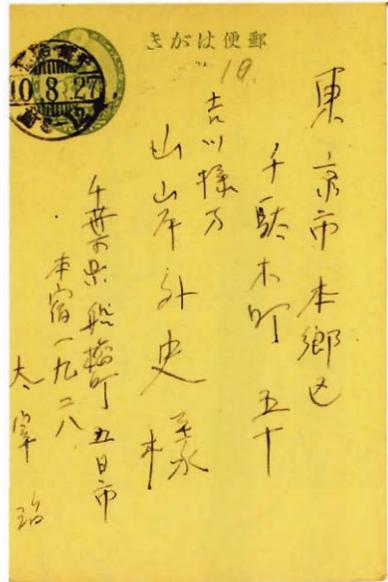
放言に就いては、

ね、

ね、

ね、

ね、



(背後をかへり見た問題に就いて。)

さうなんだ。

たしかに君は、意志的だつたのだ。それは、あのときすでにほくにも判つてゐた。ほくはあのとき、君の言行一致を感じて、おや、と思つた。好意を感じた。僕、その意味で君への手紙に書いたのだが。ほくの手紙の文、もいちど読み直してほしい。心、通ぜぬもどかしさ。「作家と批評家」なるほくの言葉もその意味なのだ。あのとき、たしかに君は意志的であつた。決意的にさへ見えた。君の「古い。」の放言に就いては、自ら答弁あり。このつぎ。

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史様
千葉県船橋町五丁目市本宿一九二八 太宰治